

27. 人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。

説教

今日は聖霊降臨日です。「過越の祭り」の七週目の日曜日で、ユダヤの暦では五旬節（ペンテコステ）と呼びました。この日は「初穂の祭り」であり、収穫の最初の実である初穂を刈り取り、神にささげて感謝しました。最終的に全収穫を刈り取った収穫感謝は、秋に行われる「仮庵の祭り」の時に行いました。

今からおよそ二千年前のこの聖霊降臨日（ペンテコステ）に、エルサレムで集まっていたイエスさまの弟子たちに聖霊が激しく臨んで、キリスト教会が正式にスタートしました。この日は、いわばキリスト教会の誕生日なのです。今、水曜日の祈り会で「ローマ人への手紙」をずっと学んでいます。先週の水曜日は8章の26節を学びました。ちょうどペンテコステなので、今日は続きの27節を中心に学びましょう。

まず基本的なことからお話しますが、聖霊は、父なる神、子なる神イエスと並ぶ、三番目の神です。聖書の神は、父、子、聖霊ですが、三つにして一つ、一つにして三つということで、これを「三位一体」と言います。聖書の神は「三位一体の神」です。一神教でも多神教ではありません。父なる神のご計画は、生ける神のことば、イエスによって啓示され、聖霊の働きによって実現してきました。聖霊は、神のことば通りに働いて、光といのちと秩序を世界にもたらします。この聖霊が、神に背く人間に働くと、罪人の知性と感情と意思とが生まれ変わります。イエスを知り、信じて、イエスに従うよう、新しく造り変えられるのです。

ローマ人への手紙8章では「聖霊」が爆発的に多用されます。パウロは、3章と4章では「信仰によって」神に義と認められて救われることを論証しましたが、8章では「信仰」ということばは鳴りをひそめ、代わりに「聖霊」がひたすら登場します。理由は、私たちに「信仰」を引き起こすのが「聖霊」であるからです。

聖霊が働くと、私たちにイエスを信じる信仰が生じます。私たちの感覚から見ると「信仰」ですが、神の側から見ると「聖霊」です。誰でもイエスを信じる者は、神の前に義と認められて救われます。でも、その信仰は自分で努力して信じるものではありません。そもそもどんなに頑張っても、信じられるものではありません。なぜなら、私たち人間は皆、全的に墮落し、腐敗しきっているからです。自然の力とか自力でイエスさまを信じることができる者は、この世に誰ひとりいません。天地創造の時に光といのちと秩序を生み出した聖霊が、全的に墮落している私たち罪人のうちに、イエスを信じる信仰を起こすのです。イエスという光といのちと秩序を生み出します。そうして、十字架による罪の贖いを罪人にもたすのです（ローマ8:1-4）。

それでパウロは、聖霊ががっしりと捕らえられて「神の御霊に導かれる人」が「だれでも神の子ども」だと定義し直します（14）。「神の子ども」なのですから、当然、親の財産を相続します。すなわち、永遠のいのち、天国、神の国を神から相続することになります（17）。これは喜ばしい大いなる恵みです。

でも、神の子となればひたすら喜ばしいことばかりがあるかといえば、必ずしもそうではありません。患難や苦しみもあります。それで、苦難をどう理解したらいいのか、パウロは18節以降で解説するのです。「苦難」をどう理解するかは、キリスト者最後の難題です。なぜなら、天国の希望を語るキリスト者も、地上に於いては苦しい人生を生きるしかないとするならば、果たして自分が本当に救われているのか疑問に思ったり、あるいはイエスを信じて何の得もないと世の人に批判されることになるからです。それで、「苦難」をどう理解するかを最終的に解き明かさなければなりません。

「苦難」の問題は、既に5章でも少しだけパウロは触れていました。そこでは、イエスさまを信じる者は神に義と認められたので、

「神との平和」は揺るぐことなく、「大いに喜んで」、「患難さえも喜んで」と言いました。理由は、「患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っている」からで、「この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです」と言うのでした。8章では、キリスト者は神の子として「キリストと、栄光を共に受ける」相続人なのだから、当然キリストと「苦難をも共にする」と一言で総括します。神の子であるキリスト者は、栄光を相続すると同時に、苦難をも味わうのです。そして、この「苦難」には特別な意味があります。それが18節以降です。

ここには三つの「うめき」が登場します。それは、全被造物、キリスト者、そして御霊の「うめき」です。

パウロは、まず、全被造物がうめいていると言います。人が罪を犯して地が呪われた結果として、世界は病み、腐敗し、不毛となり、死と滅びに向かってうめいています。こうして神が造られた全被造物はうめいています。墮落した人間が世界に汚れを撒き散らすのでうめいています。呪いと病いと死と滅びに苛まれてうめいています。世界はうめきに満ちているのです。とは言え、それはあくまで「産みの苦しみ」です。イエスさまが再び来られる時に、世界は新たに再創造されることとなります。今は滅びに向かって苦しむうめいているものの、それは新たな時代を生み出すための「産みの苦しみ」なのです。すなわち、それは栄光に向かう「苦難」でありました。

二番目のうめきは、「御霊の初穂をいただいている私たち」キリスト者のうめきです。聖霊によって生まれ変わったキリスト者なのにどうして苦しむうめくのかという問いもあります。でも聖霊によって生まれ変わったからこそ、うめきます。聖霊を受けたキリスト者は神を知ります。永遠の天国を垣間見ました。そうすると、もう地上のものでは満足いかなくなります。神を知る故に、自分の罪深さを思い知ります。この世の罪深さも思い知らされます。それでうめきます。神を知らない世の人はうめかなくても、神を知るキリスト者はうめくのです。聖霊によってキリストの十字架で罪贖われて救われましたが、その救いは未だ完成していません。罪は贖われたものの、この罪のからだは未だ贖われていません。聖霊は受けているものの、あくまで「初穂」です。聖霊の恵みの「全収穫」ではありません。今はまだ（ペンテコステ）「初穂の祭り」の段階です。聖霊の祝福の全収穫にあずかる（秋の収穫祭）「仮庵の祭り」が来たものではありません。イエスさまは、病む者を癒やし、悪霊を追い出し、飢えた者を食べさせました。それは、呪われた世界を新たに再創造するという、創造の全面回復のみわざでした。でも、それもまたあくまで「初穂」に過ぎず、回復のみわざの完成に至るまでには、イエスさまの再臨を待たねばなりません。こうして、御霊の「初穂」をいただいているキリスト者が「全収穫」をいただくまでには「忍耐」を要することとなります。約束のものを待ち望む「堅忍」を励ますのは聖霊です。そして、聖霊によって生じる「希望」です。

三番目のうめきは、御霊のうめきです（26）。聖霊は、キリスト者に聖なる飢え渴きとうめきを引き起こしますが、同時にキリスト者を全面的に「助けてくださいます」。「私たちは「弱」く、「どのように祈ったらよいかわからない」のですが、「御霊御自身が言いたいような深いうめきによって、私たちのためにとりなしてください」。「とりなす」は「（訴訟で）訴える、弁護する、（王などに）嘆願する」という意味です。うめく以外に術のない弱い私たちになり代わって、聖霊が弁護し、訴え、嘆願することで、私たちを助けてくださるとパウロは言うのです。神を知らせ、永遠の希望を知らせることで、聖霊は私たちに聖なるうめきを引き起こすのですが、同時に全面的に支えてくださいます。私たちを飢え渴かせて、神に祈させます。言葉にならないうめきの祈り、あるいは祈ってもトンチンカンな祈りしかできない「弱い」私たちになり代わって、父なる神にとりなします。そうしながら、いよいよ大きな神への飢え渴きに満たして祈させます。

「人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。」（27）ここでパウロは、神が「人間の心を探り窮める方」だと紹介します。私たちは言葉にならないうめきでしか神に祈れなくとも、神は私たちの心を熟知しておられます。祈る前から私たちの心をご存じです。同時に私たちの必要もご存じです。それで私たちは安心して祈れます。神は私たちの思いも弱さもご存じで、さらには何が必要かまでもすべてご存じだからです。パウロは、神が「人の心」を知るのみならず、「御霊の思いが何か」をも知っておられると言います。「思い」とは、何か漫然と思い浮かべるのではなく、明確に「願い、目指し、その実現のために懸命に奮闘し、躍起になっていること」を意味します。6節では「肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。」と言われていました。「生まれながらの古

い性質である『肉』が、目指し、その実現のために躍起になっている」その先にあるのは「死」で、反対に、「生まれ変わった新しい人格である『御霊』が、目指し、その実現のために躍起になっている」その先にあるのは「永遠のいのちと永遠の平和」ということとなります。

つまり、たとえ人間にはうめく以外に術がなくても、聖霊には明確に定めた目標があり、それを目指し、その実現のために躍起になっています。聖霊は「神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださっている」のです。ここの「とりなし」は 26 節の「とりなし」とは違う言葉で、「降りる、倒れかかる」、「嘆願、とりなし」の意味です。「神のみこころに従って（直訳は『神に沿って』）」と言うのですから、「聖徒」のために神に嘆願するということに加えて、神のご計画に沿って「聖徒」に働きかけるという、聖霊の豊かな働きを意味すると思われます。

聖霊は、キリスト者の内に生きて働いて、巨大な飢え渴きとうめきを引き起こします。聖霊ご自身がうめき、その聖霊はキリスト者にうめきを起こします。それでキリスト者は苦しみうめきますが、それでも神に見捨てられたわけではありません。見えないけれども聖霊が生きて働いておられます。義への激しい飢え渴きと聖なるうめきは、聖霊が引き起こすのです。神の義はあまりに高く、自分はあまりに罪深いのです。このままではいけない、何とかしなければならぬ、自分と世界を造り変えようとします。罪深い世界を改革しようと志します。神に背く、自分も含めたこの罪の世、を一つ一つ改革し始めるのです。これが聖霊です。世界に光といのちと秩序をもたらす、生ける聖霊の働きです。

こうして聖霊は聖徒たちを霊的に成長させます。キリストの似姿目指して聖化させます。これが聖霊の働きなのです。この聖霊の神秘に満ちた働きによって、苦難も益となります。その苦難は滅びに向かう苦難ではなく、栄光に向かう苦難です。地獄ではなく天国を目指す苦難です。ここに「苦難」を論じてきたパウロの最終的な答えがあります。すなわち、苦難もまた益です。神の前には、そして聖霊の前では、「苦難」もまた聖徒たちを鍛える霊的成長の肥やしとなるのです。